Ⅴ　病害虫の防除方法

１　普通作物

１）水稲

（１）種子消毒

イ）塩水選

<table>
<tr><th>対象病害</th><th>方　　法</th><th>備　　考</th></tr>
<tr><td>ばか苗病
いもち病
ごま葉枯病
その他</td><td>○比重液は、必ず比重計で調製する。
○種籾と比重液との要領比は 1:2 以上とする。
○食塩及び硫安は、完全に溶かして使用する。
○塩水選後は、水洗いを十分にする。</td><td>○比重と食塩または硫安の量は、およそ次のとおりであるが、必ず比重計で比重を調製する。
<table>
<tr><th rowspan="2">種別</th><th rowspan="2">比　重
( ):ﾎﾞｰﾒ比重</th><th colspan="2">水 10ℓ 当たりの量</th></tr>
<tr><th>食塩</th><th>硫安</th></tr>
<tr><td>うるち種</td><td>1.13（16.3）</td><td>2.1 kg</td><td>2.7 kg</td></tr>
<tr><td>も　ち種</td><td>1.08（10.6）</td><td>1.2 kg</td><td>1.5 kg</td></tr>
</table></td></tr>
</table>

ロ）温湯浸漬法

対 象 病 害	方　　法	備　　考
ばか苗病 もみ枯細菌病 苗立枯細菌病 いもち病	○浸種前の乾燥種子を 60℃10 分間あるいは 63℃5 分間浸漬する。種子を取り出したら直ちに流水で冷却浸漬する。	○発芽障害を防ぐため、浸漬時間・温度を厳守する。 ○吸水した種子、穂発芽した種子については発芽障害を起こすおそれがあるので使用しない。 （「物理的防除法」の項参照）

（２）耕種的防除法

病 害 虫 名	防 除 時 期	防　　除　　方　　法
いもち病 (苗いもち)	播種前 育苗期 移植後	○抵抗性の強い品種を栽培する。 ○窒素肥料の多用を避ける。 ○播種時の覆土を十分に行い種籾が露出しないようにする。 ○伝染源になる稲わらなどを育苗施設から遠ざけ、育苗環境を清潔にする。 ○育苗日数を適正にする。 ○冷水の流入などがないようにする。 ○残苗及び補植用の苗には、5 月下旬～6 月上旬にかけて葉いもちが発生するのでそのまま放置せず、補植終了後にただちに処分する。
黄化萎縮病	育苗期 ～分げつ期	○苗代は、浸冠水しないところを選ぶ。 ○苗代で発病した苗は抜き取って焼き捨てる。 ○本田初期の発病がはなはだしい時は、抜き取って植え替える。
ごま葉枯病	播種期 ～移植前	○常発地は、客土や深耕をし、堆きゅう肥を増施する。 ○硫酸根肥料の施用を避け、肥切れしないように合理的に分施する。
白葉枯病	播種前	○苗代は浸冠水しないところを選ぶ。 ○窒素肥料の多用を避ける。
墨黒穂病	播種前 収穫期	○指定種子生産ほ産種子を使用する。 ○前年激発したほ場ではササニシキ以外の品種を作付する。 ○収穫前に発生状況を把握し、発生ほ場は刈り分けする。 ○適切な乾燥・調製に努める。
苗立枯細菌病 もみ枯細菌病	播種前 育苗期 移植期	○種籾は罹病苗移植田及びその周辺ほ場からは採種しない。 ○本田発病地を苗代としない。また、その土壌で育苗しない。 ○塩水選を徹底する。 ○標準育苗法を厳守し、特に出芽温度は 30℃以上にしない。また、床土は過湿にしな ○プール育苗で常時湛水状態に保てば、発病が抑制される。 ○発病苗は移植しない。

病害虫名	防除時期	防　　除　　方　　法
苗立枯病	播種前 ～生育中	○育苗器具、資材施設は清潔にする。 ○種籾には傷籾を使用しない。 ○土壌酸度を矯正する。(pH5.0) ○厚播きを避ける。1箱当たりの用土量は5ℓとする。 ○種籾が露出しないように、ていねいに覆土する。 ○出芽温度は適正にする。 ○育苗管理を適正にする（高温、低温、乾燥、過湿に注意する)。
ばか苗病	播種前 育苗期 ～本田中期	○指定種子生産ほ産種子を使用する。 ○塩水選を確実に実施する。(「塩水選」の項参照) ○発病苗株の早期抜き取りを徹底する。
紋枯病	播種前 移植期 穂ばらみ期	○窒素肥料の多用を避ける。 ○代掻き後の浮遊物や残渣の除去。 ○防除要否の目安は穂ばらみ期の発病株率18%とする。（品種：ひとめぼれ、収量が5%以上の減収を想定して防除する場合）（「病害虫の要防除水準」の項参照）
縞葉枯病	生育中	○発病株は早期に抜き取る。
アワヨトウ	－	○洪水後の水たまりや最後に水の引いたところ、軟弱な生育の稲では、発生に注意する。
イネツトムシ	－	○晩植、多肥、直播栽培の水稲に被害が多いので発生に注意する。
イネハモグリバエ	－	○イネハモグリバエは、マコモ周辺に発生が多いので発生に注意する。
イネヒメハモグリバエ	－	○早植田、深水田、直播栽培において、発生が多いので注意する。
斑点米カメムシ類	５月～６月 ７月中旬 ７月下旬	○イヌホタルイやヒエ類等の水田雑草を除草する。 ○発生源となる雑草地、牧草地を刈り取る。 ○水田周辺の雑草を水稲の出穂10日前までに刈り取る。

（３）農薬による病害虫の防除方法

【注意】農薬使用に当たっては、必ず農薬容器のラベルを確認し、使用方法に散布液量（または希釈水量）の記載がある場合は、その量を遵守すること。

イ）農薬による種子消毒作業順序

【もみ枯細菌病・苗立枯細菌病・ばか苗病・いもち病・ごま葉枯病の同時防除】

○粉衣消毒法（湿粉衣消毒）

塩水選→水洗→水切り→ ・モミガードＣ水和剤　乾燥籾重の 0.5% → 風乾 → 浸種（２日間）

○高濃度液短時間消毒法（10 分間浸漬消毒）

塩水選→水洗→水切り→ ・テクリードＣフロアブル　20 倍液 → 風乾 → 浸種（２日間）

○低濃度液長時間消毒法（24 時間浸漬消毒）

塩水選→水洗→水切り→ ・テクリードＣフロアブル　200 倍液
・モミガードＣ水和剤　200 倍液 → 風乾 → 浸種（２日間）

○吹付消毒法

塩水選→水洗→水切り→ ・テクリードＣフロアブル 7.5 倍液 (乾燥種子重 1kg 当たり希釈液 30ml)
・モミガードＣ水和剤　7.5 倍液 (乾燥種子重 1kg 当たり希釈液 30ml) → 風乾 → 浸種（２日間）

【もみ枯細菌病・苗立枯細菌病の同時防除】

○粉衣消毒法（湿粉衣消毒）

塩水選→水洗→水切り→ ・スターナ水和剤　乾燥種子重の 0.5% → 風乾 → 浸種（２日間）

○低濃度液長時間消毒法（24 時間浸漬消毒）

塩水選→水洗→水切り→ ・スターナ水和剤　200 倍 → 風乾 → 浸種（２日間）

ロ）苗立枯病防除体系と主な薬剤

処理時期	播種前	播種時	緑化開始時	播種２週間後

（使用農薬）

○床土に水田土、畑土、山土を使用した場合

育苗箱土壌混和
【フザリウム】
【ピシウム】
タチガレエースM粉剤
ナエファイン粉剤
【ピシウム】
オラクル粉剤

⇒

灌注処理
【リゾプス】
ダコニール 1000
【トリコデルマ】
ベンレート水和剤
【リゾプス】
【トリコデルマ】
ダコレート水和剤

（必要あれば）→

灌注処理
【フザリウム】
【ピシウム】
タチガレン液剤

○床土に人工培土を使用した場合

育苗箱土壌混和
【フザリウム】
【ピシウム】
ナエファイン粉剤
【ピシウム】
オラクル粉剤

灌注処理
【リゾプス】
ダコニール 1000
【トリコデルマ】
ベンレート水和剤
【リゾプス】
【トリコデルマ】
ダコレート水和剤

⇒

灌注処理
【フザリウム】
【ピシウム】
タチガレエースM液剤

（必要あれば）→

灌注処理
【フザリウム】
【ピシウム】 タチガレエースM液剤
【リゾプス】
ダコニール 1000
【フザリウム】
【ピシウム】
【リゾプス】 ナエファインフロアブル

（必要あれば）→

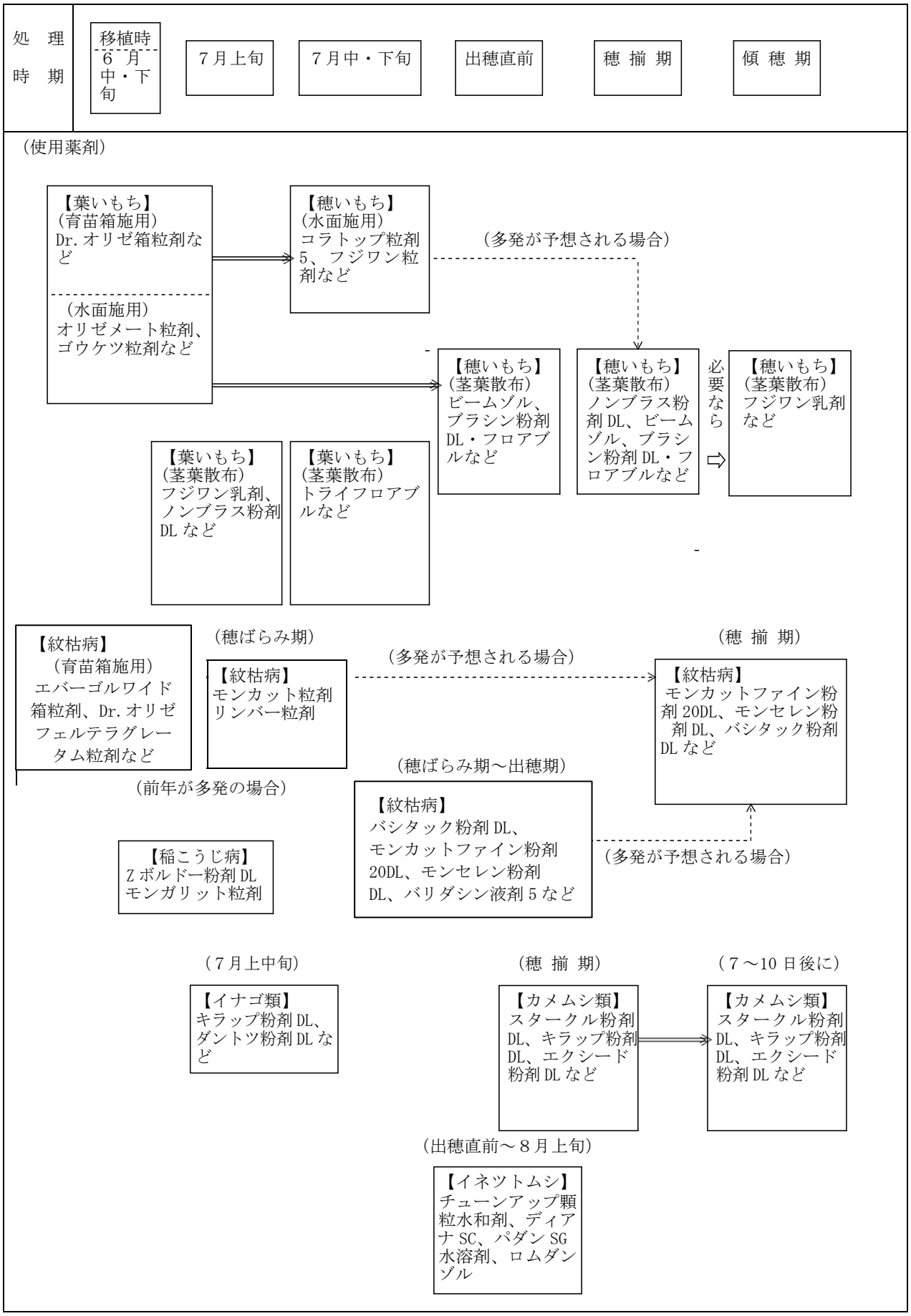
○発生してからの防除では効果が低いので、予防防除に努める。

○床土の pH が高い場合はピシウム属菌とフザリウム属菌が、低い場合はトリコデルマ属菌が発生しやすくなるので、適正な pH（4.5～5.5）の床土を使用する。

○出芽期間中の 32℃以上の高温はリゾプス属菌の発生を著しく助長するので、温度管理に気を付ける。

○育苗期間中に極端な低温に遭うと、フザリウム属菌及びピシウム属菌が発生しやすくなるので、そのような場合には、予防的にタチガレン液剤を灌注する。

○ダコレート水和剤とタチガレン液剤との近接灌注（３日以内）は、薬害を生ずる場合がある。

（４）農薬による育苗期及び本田での防除方法

イ）中期・後期病害虫防除体系と主な薬剤（同一系統薬剤の連用・多数回散布は避ける）